

小学部六年B組

「帰り道」

池上 楷

ぼくが、「帰り道」を読んで分かったことは、律と周也という二人の登場人物が帰り道に考えのすれちがいを起こしたことです。

律は昼休みに周也と他の友達のペースについていけなくて、自分の言っていることに自信を持ってなくなっていました。一方で周也ははっきりしない律にじりじりし、つい言わなくていいことを言ってしまった。二人は帰り道に昼休みのことについてしゃべれませんでした。が、天気が雨が降った時に律がやっと言いたかったことが言えました。周也は何を言えば良いかがわかりませんでした。律は、自分の思いを正直に言うことができ、周也に対して意見のすれちがいが無くなりしました。

ぼくは、「帰り道」を読んで律に共感できることがありました。なぜなら律が周也に対するように、言いたいことを言葉に表すことができないうことがあからずです。

言葉のかべを乗り越えて

スミス 将仁

ぼくは、「律」に似ていると思いました。なぜなら、日本語で自分の思いを表現することが苦手だからです。みんなの話のテンポについていけず、取り残されたような気持ちになることがあります。ずっと、み

んなのように自分の思ったことを言えたらいいな、と思っていました。でも、グループ活動を通じて少しずつ話せるようになりました。グループの中だと気持ち楽になり、発表中に言葉が出てこなくなっても、仲間がフォローしてくれるので安心できます。一人ではできないことも、みんなが協力すればうまくいくことがわかりました。

今もぼくは自分の思ったことを伝えることが苦手です。でも、グループ活動を通して、ほんの少しだけ前に進めた気がします。これからも「思いを伝える言葉」を大切にしていきたいと思っています。

私と本 あきらめなければ、目標は達成できる

有村 海音

私は、「あきらめなかったら、目標は達成できる」というテーマで、三冊の本をしようかと思いました。私が選んだ三冊の本は、私にあきらめないことの大切さを教えてくれました。

一冊目の本は、「ヘレン・ケラー」です。ヘレンは、病気で目が見えなくなつて、耳も聞こえなくなっていました。その結果、話ができなくなつてしまったので、話す勉強を始めたけれど、とても難しかったので、あきらめそうになりました。しかし、家族と話をしたという思いから、あきらめずにがんばり続け、話せるようになりました。

二冊目の本は、「ライト兄弟」です。ライト兄弟は、二人とも小さいころから、空を飛んでみたかったので、二人で飛行機を作り始めました。けれど、何回やっても飛行機は飛ばず、失敗続きでした。そのため、二人ともあきらめようとしたこともありました。空を飛ぶことが小さいころからの夢だったので、あきらめずにがんばり続けました。その後、何回か実験をくり返した後に、ついに飛行機を飛ばすことに成功しました。

三冊目の本は、「マザー・テレサ」です。マザー・テレサは、小さいころから、貧しい人や病気に苦しむ人を助けたいという思いがあり、宣教師になりたいと思っていました。修道女になり、困っている人々を助け始めましたが、お金がなかったり、異教徒からいやがらせを受けたりと、何度もかべにぶつかりました。それでも、あきらめず、一人でも多くの人を助けるために、がんばり続けました。その長年の努力が認められ、ノーベル平和賞をもらいました。

目標を達成するためには、みんなそれぞれ、いろいろな困ったことや大変なことに出会います。それらをのりこえて、あきらめずに努力を続けることで、最後に目標を達成しているのだということを、これらの本の人たちは教えてくれました。

私には、入りたいダンスのチームがあり、そのチームに入ることを目標に、毎日ダンスの練習をしています。私よりダンスが上手な人がいるので、私とそのチームに入るのは無理なのではないか、という思いになる時があります。けれど、私もあきらめず、これからもダンスの練習をがんばり続けようと思っていました。

これらの本に出会えたことは、今の私にとって、大切なことでした。みなさんも、元氣と勇氣をもらえるすてきな本と出会えるといいですね。

私と本 ブックトーク

木川 航太

僕は、「人を助ける犬」をテーマに三冊の本を紹介します。人を助けたり励ましたりする犬の本です。

一冊目は、「盲導犬クイルの一生」です。盲導犬とは、ただ目の不自由な人の道案内をしてくれる犬だと思いませんか。しかし、実は違うのです。盲導犬とは、一緒にいるだけで気持ち明るくなる友達で

もあるのです。クイルのマイペースな性格は、盲導犬にぴったりなものでした。僕は、この本を読んで、盲導犬の大切さを改めて知りました。

二つ目は、「ありがとう。バディ」です。バディとは、立教女学院小学校の初代学校犬です。生まれた時から息を引き取るまでの十一年が書かれています。僕はこの話が奇跡(きせき)だと思いました。なぜなら、教室に犬がいて、児童が世話をするなんて、ありえないからです。そんなことを思いながらこの本を読んでいました。僕は、バディと小学校のみんなの間に深い絆(きずな)が生まれていたからこそ、十一年もバディは小学校にいたことができたのだと思います。

三冊目は「命を救われた捨て犬 夢之丞」です。夢之丞は、動物愛護センターで殺処分前に救われ、ピースウィンズ・ジャパンで育ちました。やがて、広島県で土砂災害が起きたとき、一人の遺体を見つけました。そして、その後も数々の命を救いました。僕は、もし夢之丞が動物愛護センターで殺処分されていたら、どんなに多くの人命が落とされていたのだろう、と思います。そして僕はこの話を読んで、災害救助犬の大切さ、そしてどんな命も大切にしなければならぬということを感じました。

このような、人を助ける、励ます犬は、大好きな僕にとって、すごく大切な本です。あなたも、犬の好き嫌い関係なく、ひまなときにぜひこの本たちを読んでみてください。

私は、夏休みに読んだ三冊のミステリー小説をしようかいたします。三冊とも、ある事件が起こり、主人公達が協力して解決する本です。

一冊目は、「ぼくらはズッコケ探偵団」です。三人の登場人物が、それぞれの長所を生かして殺人事件を解決した場面が面白かったです。三人の力を合わせてヒントを探し出しながら犯人を見つけだした所から、二人は仲がいいなと思いました。この少年達のとて勇ましくてやさしい面も役立ったと思います。

二冊目に、「三毛猫ホームズの探偵日記」を読みました。この小説には、事件のヒントを探偵団にくれたり危険から守ってくれたりするねこがいます。私は、このねこが見つめる先にいつも事件解決のカギがあることにとてもびつくりしました。あまりめつたにいないねこのので、私も会ってみたくまりました。みんな真逆の長所を持っていますが、三人の人間と一びきのねこの探偵団は協力して事件を解決しています。私はここにとても感動しました。

三冊目の小説は、「大どろぼうホッツエンプロッツ」です。これは、ホッツエンプロッツと言う大どろ棒と、かれを捕まえようとする二人の少年カスパーとゼツペルの話です。また、他の二冊の小説とちがって、どろ棒はもうだれか分かっています。問題は、どうやって二人の少年が大どろ棒を捕まえるかです。しかし、これも二人が協力したから大どろ棒ホッツエンプロッツを捕まえることができたのだと私は思っています。

ミステリー小説の面白いところは、だれが犯人か予想しながら読むことです。私も一緒に犯人を考えながら読んだのでわくわくしました。また、小説の主人公達が協力し合いながら事件を解決していく所が好きでした。

私は「やまなし」を読んで、賢治は読者にたくさん命は怖い事や嬉しい事がある中、生きている事を伝えたかったのだと思います。例えば、かにとつてかわせみは命をうばう、怖い生き物だと思います。また、やまなしはかこの後でのお楽しみだと思えます。

かわせみが魚をいきなり取って、かこの子どもがきょうふを感じた場面が、一番賢治が伝えたい「怖い事」だと思いました。私にとつてのかわせみは津波、洪水、地震などの自然災害や病気、戦争、交通事故だと思えます。けれどもかわせみは、自分が生きるために魚の命をうばいました。私たちにとつての「怖い事」は、少しちがうと思いました。私たちの「怖い事」は、少なくできるかもしれません。

やまなしが、トブンと落ちてきて、かいらが嬉しい気持ちになつていた場面が、一番賢治が伝えたい「嬉しい事」だと思えます。私にとつてのやまなしは、自分の命や幸せにつながるものです。例えば、冬にとれる収穫物を家族や友人などの親しい人と楽しむことです。お腹も心も満たされます。かにも、二匹の兄弟とお父さんでやまなしを楽しみにしているようでした。これは、かわせみのときにはなかったことです。

このように、「やまなし」という賢治の幻灯は、たくさん命は怖い事や嬉しい事がある中で生きている事を伝えたかったのだと思います。私はこのお話を読んで、怖い、辛い事があっても、嬉しい事もあるのだと思えます。これから私は「怖い事」が起きても、「嬉しい事」もある事を忘れずに生きていきたいと思いました。

ぼくは、「やまなし」を読んでなぜだろうと疑問に思ったところがあります。

それはなぜ「五月」と「十二月」という表現にしたのかということですが。一度読んだだけではなかなか話の理解ができず、ぼくは何回も教科書を読んだり宮沢賢治について調べたりしました。そこで思ったことは、「五月」はかにたちが行きぬく力を覚えていくのを伝えているのではないかと思えました。父かには、かにの子どもに生きぬく方法を伝えていて、正しく自然の中を生きる力を教えているのだと思えました。

それとは逆に「十二月」は、かにはふんわり楽しそうに生きているようにぼくは感じました。「十二月」は宮沢賢治の理想である「未来に希望をつなげる」という思いが深く関係していると思えました。

次になぜ宮沢賢治は「やまなし」という題名にしたかということですが。「イーハトーブの夢」を読み、賢治が生涯（しようがい）で多くの災害に見舞われたと知りました。しかし賢治はその災害を苦しいもので終わらせるのではなく、安心して田畑を耕せるよう農業技術を学んだとも知りました。自然と共生するべきだと思ったのではないかと、とぼくは考えました。だから「やまなし」は豊穰（ほうじょう）の象徴（し）ようちよう）であり、自然の恵みではないかと思えました。かわせみみたいなこわい存在もあるけれど、自然には平和や恵みがたくさんあることを伝えたいのだ、と思えました。

ぼくはこの本を読んで、いろんなことを思いました。「五月」と「十二月」という言葉を使い、かにの気持ちや状況のちがいを伝え、自然のこわさがあるけれど、平和もあるということですが。

私は、「『鳥獣戯画』を読む」を読んだ後に、筆者の工夫とその効果や筆者が述べた評価について考えました。

筆者の工夫とその効果では、三パターンあります。一つ目は、論の展開についてです。論の展開では、初めに「鳥獣戯画」の一場面を説明していることが工夫だと思えます。その効果は、絵に注目させて、漫画のように思えてくるのではないかと読者に言うためだと思います。

二つ目は、表現の工夫についてです。百五六ページの四行目の「ひるんだところに蛙が…」と言うことによつて、読者に想像させることができます。また、体言止めや言い切りを使うことによつて、よりその言葉に迫力が増し、印象付けることができます。三つ目は、絵の表し方についてです。工夫は、つながっている絵をわざと分けて見せていることです。その効果は、二つの絵に分けることによつて、アニメの原理や紙芝居と似ていると言うためだと思います。

三つ目は、筆者の評価が表れている文章についてです。筆者は「鳥獣戯画」の評価について、私たち読者が思わず絵に注目してしまうような言葉で文章に表しています。他にも、絵の一部分をととても細かく観察して、線の太さや動物のポーズを評価しています。

筆者は、「鳥獣戯画」の表現の工夫に注目し、読者にその魅力を分かりやすく伝えようとしています。私も、筆者の解説を通して、一目も見たらただの動物の絵に見えるものが高い技術によつて描かれていることに気付かされました。こんなにも昔からあるものが、身近な漫画やアニメに関係しているとは知らなかったのだとおどろきました。この単元で私は、様々な筆者の工夫を知りました。私もその工夫を使って、いろいろな説明文を書いてみたいです。

「『鳥獣戯画』を読む」を読んで

ヌールフアラク ヒロユキ

「『鳥獣戯画』を読む」の筆者は、初めの段落でまずこの絵がどんな絵かを説明しています。そこで、この絵が「漫画の祖」と言われていることを述べて、そのことが理解できるようにいくつかの工夫がされています。

「『鳥獣戯画』を読む」を読んで、自分もまねしたいと思ったことは『鳥獣戯画』が一枚の絵であるのに、その中に時間の流れが表現されていることを、右から左へ動物たちの動作や表情について細かく見ていくことで説明しているところです。

次に、写真や絵の使い方、説明の仕方でも効果的だと思った点は『鳥獣戯画』の絵を二つのページに分けて、動物たちが漫画やアニメの様に動いて見えるようにしたところです。自分でも、ノートの二つのページに絵をかいてめくったり閉じたりして遊んだことがあるので、本でも同じことが出来るのだと感心しました。

このようにして、読み手が日本文化の漫画やアニメの歴史についてよく分かると思います。

世界に誇（ほこ）る日本の総合アート

植野 咲

歌舞伎は四百年前から愛されている世界に誇る日本文化の一つです。音楽・舞踊（ぶよう）・演技が一体となった日本の代表的な総合舞台芸術で、江戸時代に庶民の芸能として誕生し、「歌」「舞」「伎」の三要素（音楽性、舞踊性、演技・見物性）を融合（ゆうごう）させ、物語や華（はな）やかな舞台演出で観客を楽しませてきました。演技が中心と

なっている歌舞伎ですが、それだけではなくメイクや衣装、音楽などの魅力（みりよく）があります。

まず、歌舞伎を演じる役者は全員男性です。そして、女性の役も男性が演じています。にも関わらず、女性のように上品な話し方や動きで観客を魅了（みりよう）します。

次に、歌舞伎には特殊（とくしゆ）なメイクがあり、その一つが隈取です。この技術で登場人物の性格や気持ちと目で分かるようになります。例えば赤い隈取は正義の心、青い隈取は悪の心を表しています。そして、見得と呼ばれる独特な演技で際立たせる役割もあります。

さらに、歌舞伎は華やかな衣装でも観客を驚かせます。歌舞伎の衣装はものにもよりますが何キロもする重いものもあります。それを平気な顔をして着るのも役者の努めです。

一人の役者が短時間で衣装やかつらを変えて別の役柄（やくがら）を演じる舞台演出が「早変わり」です。「引き抜き」や「ぶっかえり」といった特殊な仕掛（しか）けを使い、観客の目の前で瞬時（しゆんじ）に衣装が変化する様子が魅力です。主に舞踊の「引き抜き」では重ね着した衣装の糸を引いて下の衣裳（いしやう）を現し、「ぶっかえり」は劇中で裏返った衣装で本性を見せるなど、心理描写（びようしゃ）や変身を視覚的に表現します。これらは、役者と裏方の息の合った連携（れんけい）と、職人による精巧（せいこう）な衣装作りによって支えられる「技術」です。

最後は、歌舞伎の音楽です。歌舞伎では、長唄（ながうた）や、三味線などといった伝統的な楽器が使用されています。歌舞伎では演奏家のことを囃子（はやし）と言い、一人前になるためには長年の修行が必要です。

舞台下手（向かって左）にある簾（すだれ）の向こう側の黒みすと言われる場所で演奏されるのが、舞台の進行に合わせて効果音や音楽を奏（そう）でる「下座音楽（げざおんがく）」です。また舞踊劇などでは、長唄や鳴物が舞台上で観客に見えるように演奏される場合もあります。

一つの作品に、俳優や裏方の数えきれない工夫が重ねられ、今現在の

集大成が、目の前の舞台に広がっている、それが歌舞伎なのです。緻密（ちみつ）な物語構成、様式美を極めた所作や隈取、豪華絢爛（ごうかけんらん）な衣裳と舞台装置が相まって、時代や人間の情念を豊かに描き出し、今日に至るまで観客を魅了し続けています。

長い年月を掛けて技術が積み重なり、多くの人の力の結集であり、決して一朝一夕で確立した演劇ではありません。多くの人の努力の結晶であることも歌舞伎の魅力の一つです。そんなところにも注目して、みなさんも歌舞伎を鑑賞してみませんか。きっと日本の伝統文化の魅力に気づき、これまでとは違う見方ができるはずです。

力を合わせて、運動会

入江 海

みなさんは十一月一日に行われた運動会、楽しかったですか。ぼくは、ものすごく楽しかったし、おもしろかったです。その中でも、特に心に残ったことが、二つあります。

一つ目は、障害物競争です。ぼくのクラスでは、男子がとても少ないです。なので、今回の障害物競争ではぼくが二回走りました。障害物競争は障害物をよけながら走ってゴールまで行くレースです。ぼくたちの障害物はまず棒です。その棒の周りを三回回ると次に進めます。次はぼくが一番心配だった、なわとびです。やることは、その場で十回なわとびをとぶだけです。しかしぼくはリレー選手であったため、学校の休み時間になわとびを練習できませんでした。ここで失敗するとタイムロスになるというのもあって一番緊張しましたが、無事十回とぶことができました。最後の障害物はテープです。コースにテープが張りめぐらされていて、上にあるテープはくぐり、下にあるテープはその上をジャンプします。それを終えたら、あとはゴールするだけです。一直線のコースを走ってゴールです。一回目は二位で、二回目は一位でした。と

ても楽しかったのでまた来年もやりたいのですができないので、来年六年生になる人たちに楽しんでもらいたいです。

二つ目は、応援です。今年の運動会でぼくは、自分たちの番が終わったら、テントにもどって遊んでいました。そのためぼくはしていませんでした。ぼくは、自分の番の時、ほかの人が応援してくれているのが聞こえています。その応援を聞くととてもポジティブな気持ちになれました。よって、これからは応援をしてみんなをポジティブな気持ちにしたいです。

これらを通して、ぼくは改めて気付かされたことがあります。それは、力を合わせる事が最も重要だということです。障害物競争では、友達にコツを教えてもらったり、応援などをしてもらったりして、明るい気持ちでいられました。このように、力を合わせて協力するという思いやりの心を大事にしていきたいです。

なわとび

川島 璃紗

私が今年の運動会で特に印象に残っている競技は二つあります。

一つ目は学年競技です。学年競技はほとんど練習していません。足がはやいのはのさんといっしょだったからすごく心配でした。スタートした時にテンパって棒を一回ぐらい多く回ってしまつて、それにまたあせてなわとびが終わって走りだすときになわとびが足に引っかけた、結局四位になりました。もしなわとびが足に引っかけたらもつとはやかったのかなと思つてくやしかったです。

二つ目はリレーです。リレー選手に選ばれたのは補習校に入ってから初めてで、しかも選手を決めるときに一位でゴールができたのもうれしかったです。リレーでもはるのさんがいっしょで、さらにりささんともいっしょだったので、本当に心配でした。バトンをわたされた時に

は、もう頭が真っ白でとにかく走りました。最後の方にぱっと少し後ろを見たらはるのさんがいて、全力で走ったら一番でバトンをわたせたので安心しました。走っている時におうえんしてくれる声が出てうれしかったです。

今年白組は負けてしまつてくやしけれど、運動会は楽しかったです。特にうれしかったのは、私が一番先頭でバトンをわたせたことと、私たちの部のリレーは白組が勝つたことです。これからもいろんなことに全力でがんばろうと思います。

今年は特別

田中 千晴

今日は、運動会がありました。運動が苦手な私は、毎年このイベントが好きではありませんが、今年は違いました。運動会の放送を手伝わせてもらったのです。

私が読んだのは、中・高等部の「大玉様お百度参り」の最初の説明と、「紅組がんばれ、白組がんばれ」等の応援放送でした。「大玉様お百度参り」は、すでにセリフが決まつていて、スラスラと出てきて自分でもおどろきました。しかし、応援放送はアドリブです。私は言葉選びがおそく、一緒に放送担当をした悠陽ちゃんと真歩くんにくさんカバーしてもらつてしまい、ひたすら申し訳がありませんでした。それでも、助けてくれた二人はかっこよくて、私もこんなふうになりたいと思いました。二人ともありがとう！！

今日、もう一つ心に残つたのは、四、五、六年生のリレーです。私は足がおそいので、この競技には出られませんでした。それでもこのリレーはとても見ごたえがありました。最初、白組はあまり良い状況ようでは無かったにも関わらず、知っている子や友達が、どんどん紅組をぬかしていきます。クラスの友達四人もそのうちの四人です。敵チームに追

いつかれそうでひやひやしたり、こっちが追いこしたりしているうちに、白組と黄組（どちらも白組）が、一位と二位を取りました。みんな帰つて来た時には疲れ果てていました。

こんなにみんなががんばっても、白組は負けでした。こんな私でも、いくつかの競技に出たので、とてもくやしかったです。でも、負けたからこそ、「勝つた！」事より、自分が一生けん命とんで走つたことや、みんながかっこよかったことが心に残つた、特別な運動会になつたと思います。

心をひとつに

篠崎 咲花

今回がヒューストン日本語補習校での初めての運動会でした。前の補習校では、全校生徒（幼稚部から中学生まで）で、約三十人でしたので、今回どれくらい大規模なのか、運動会が待ち遠しかったです。

第一部は妹がいるので見ていたのですが、白組が勝つていて、すごく嬉しかったです。

第二部では、最初に大玉転がしをしました。初めてだったので、きちょうしましたが、なんとか上手くできて、良かったです。

「目指せ、ロサンゼルス！」の競技で、棒の周りを三回回る時に、何回やったか分からなくなり、スタートが出遅れてしまい、個人的にそこが惜しかったです、と思いました。

この時には点数の差が約三十点もあつたので、巻き返せるか不安でした。けれども、紅白リレーの時、みんなががんばり最後まで力をふりしぼつてくれたおかげで、点数の差が縮まり、応援している側もすごく嬉しかったです。

最終的に、白組は勝敗では負けてしまいましたが、みんなで力を合わせてがんばれたと思います。そして、それぞれが努力を重ねたおかげで

もあると思います。来年は、初めての年での中等部ですが、先輩たちみたいにボランテアになり、ほかの人たちをヘルプしてあげたいです。

休みの日

ソネンバーク 恵美

五月二十三日の朝、友達のカーマン家族が私の家まで迎えに来てくれて、「ポップストローク」というミニゴルフ場に連れて行ってくれました。そこでカーメン、私、そして彼女の弟と妹といっしょに、十八ホール全て交代しながら、パターゴルフを楽しみました。カーメンの妹のオリビアがホールインワンを一度決めましたが、私はほとんどのホールを二打で終わることができたので、みんなに勝ち、一位になりました。

ミニゴルフの後にはカーメンの家に行って、一時間ほどプールで泳ぎました。泳ぎながら、「モンキー・イン・ザ・ミドル」という遊びをしたり、「マルコ・ポーロ」の遊び方を教えてもらったりしました。その後、体をふいてからホールフーズへ昼ごはんを食べに行きました。私たちはおすしと泳いだ後でまだ寒かったので、温かいスープを飲みました。

食事の後、またカーメンの家に戻って、私の母が迎えに来るまで、一緒に遊びました。家に帰ってからは、友達とたくさん遊んだ分、宿題をしなければなりませんでしたが、楽しい一日でした。

「学校のそうじ」にかくれた大切なこと

淵本 惟葉

私は、学校のそうじは自分たちでするべきだと思います。なぜなら、そうじを通して学校を大切に作る気持ちや、みんなで協力する力を学べると思うからです。

私は小学五年生の時にアメリカに来ました。アメリカの学校では、そうじはすべてそうじの人がしてくれます。最初はそうじの時間がなくなってしまうけれど、教室やカフェテリアのゆかにゴミを落としてもそのままにする人が多く、「だれかがやってくれる」と思っているように感じました。私はそのような様子を見て、「ここでは、そうじに対する考えがちがうんだな」と不思議に感じました。

日本の学校でみんなといっしょにそうじをすると、自分の使う場所をきれいにしたいと思うし、友達と協力して働くことの大切さや楽しさも学べます。また、そうじが終わった後に教室がピカピカになると、とても気持ちが良かったです。

もしそうじを自分たちでしなかったら、学校を大切に作る気持ちや感謝の心が弱まってしまいうちがします。だから私は、学校のそうじは自分たちでするべきだと思います。そうじをすることは、学校をきれいにするだけでなく、人として大切なことを学べる時間ではないでしょうか。